

ほのぼの

第69号

令和7年

3月

発行

信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町1-2-3

TEL.078-732-5209



人間の知識

前住職

誰でも損はしたくない。人間は欲の世界に生きていますから、損になることを避けようとするのは当然です。日本の代表的な年間行事の一つに「節分」があります。二月に行われる鬼払いの行事で「鬼は外、福は内」と、豆をまいて鬼を追ひ払う儀式です。昔からの伝統行事ですから私たちは慣れっこになっています。それゆえ、この行事の主旨に疑問を感じにくいのですが、「鬼」を不幸、「福」を幸福とするだけなら問題にしくなくてもいいでしょう。しかし、私たちはこの思考の延長線上で自分の嫌いな者、役に立たない者、利用価値のない者などを無意識のうちに「鬼」の立場にしていけないでしょうか。もしも自分が鬼の立場になっていたらどうでしょうか。すなわち嫌われる者・無視される者の立場におかれていたなら、大きな声で「鬼は外」と言えませんか。他人の場合でも同じことです。これは社会問題になっている「いじめ・排除の意識」に通じてはいないでしょうか。鬼を

「きらい」福を「すき」の思いが独善と偏見にならないようにしたいものです。

自分が一番中心でありたい。得をしたい。幸せになりたいとの思いは誰もが持つものですから他人も同じ思いです。

人間の欲は臨終の一念にいたるまで離れません。独善と偏見による善や正義によって争いの場を作っています。平和を願っておりながら弱肉強食の争いを招く。個人同士の争いでは小さくても、国と国なら大きな争い「戦争」です。大小にかかわらず争いは「相手のいのちも、自分のいのちも、平等である」という事実を見失わせてしまいます。

二月は仏陀釈尊が涅槃（浄土の世界）入られた月ということで、禅宗の寺などでは涅槃会という法要が勤まります。その時に釈迦涅槃の図が披露されます。涅槃図には多くの嘆き悲しむ姿が描かれています。仏弟子をはじめとして、帝釈天など天の神々から大小の動物、大きな象や小さなネズミ、カエルなどにいたるまでの生き物がお釈迦さまとの別れを悲しんでいる姿です。姿や能力などは違っていても、「いのちは平等であること」を教えてください。たお方がお釈迦さまで

あったことを表しています。

私たちの知識は役に立つか否かで分別します。役に立つ者は「内」、立たない者は「外」です。自分に都合の善い人は「内」、悪い人は「外」です。「外」とは、否定され無視されることです。

しかし、人間の知識は経験して知り得ただけのものです。ものごとはそれだけが全てではありません。経験外のことを分かってもらえないのに「分かったつもり」でいます。迷いの中の見解です。

親鸞聖人はご自身を「愚禿（ぐとく）」（欲に振り回されている者）と名のられ「鬼」はご自身の本性であると気付かれました。それは人間の知識による判断ではありません。如来さまより知らされた事実です。自分では自分の全てを知ることできません。親鸞聖人は阿弥陀さまが「五劫思惟」のご本願を建てられた理由がご自身にあることを知らされ「弥陀の五劫思惟の願は親鸞一人がためであった」と仰せをいただかれています。善し悪しを問わない如来さまの救いをいただきますよう。



合掌



念仏奉仕団に参加して

米田 空城

この度、念仏奉仕団の引率として参加させて頂きました。日本全国各地から大勢の門徒さんが本山に集い、共に報恩感謝の清掃をさせて頂きまして、とても貴重な経験となりました。信行寺は、有難いことに本山へも比較的近く、祖母をはじめ信行寺門信徒の皆様は毎年参加することを楽しみにしています。おかげで無事に今年度も参加することができました。本山では、職員の方々が色々と丁寧の説明と案内をしてくれます。また外陣の畳をからぶきしながら、平生ではなかなか近くに見ることのないお荘厳などを改めて拝観しました。気の引き締まる思いを味わいながら、本山の阿弥陀様、親鸞様のお膝元に皆様で参拝していますと、自然と念仏の中で生かされている私に改めて気づきます。また、そのような気持ちの方々が全国に居られるということに喜びを感じました。念仏奉仕団は、近年参加者が高齢化してきています。たしかに団体でなく

ても参拝はいつでもできます。しかし、こうして年齢も様々な全国の方と同じ空間を共有することは、また別の経験です。同朋という言葉がありますが、法に繋がる関係、学校や社会にはない関係がそこにあります。普段の暮らしでは忘れがちな感謝の心。私は、皆様と一緒に清掃活動をしながらかつても貴重な一日を過ごすことができました。たくさんの方の思いに支えられて、さらに次の世代へこうした念仏の輪が広がるように、私自身も報恩感謝の生活を伝えていくようにと深く思います。

私もいよいよ社会人となりましたが、今後も門徒の皆様のお役に少しでも立てますように尽力させていただきます。そして、世話役の方々には大変にお世話になりました。ありがとうございました。

合掌



三十年目の朝を迎えて

米田 正樹



一九九五年一月十七日から三十年が経ちました。毎年この日が来るたびに様々な思いがよみがえってきます。お寺が無残に燃え尽きた姿を今でも昨日のことのように覚えています。沢山の人のおかげで今の信行寺があります。本当に感謝しかありません。

私はこの日を一生忘れることはありません。今回、三宮の東遊園地の「1・17のつどい」に参加してきました。私と同じように「あの日を忘れてはいけない」と思っている人たちとあの時間を過ごし、もう一度自分の中でしっかりと三十年前の日を確認したいと思い、参加しました。東遊園地に着いた私はびっくりしました。狭い敷地の中に、身動きが取れないくらいの人が集まっていました。この光景に三十年経っても神戸の人たちの思いは同じなのだと感じ、無性に感動しました。広場には、無数の竹灯籠がならんでいました。



竹灯籠には墨で文字が書かれており「命」

「生」「絆」「友」「忘れない」「祈」「愛」

「夢」「感謝」など様々な言葉が書かれて

いました。この一つ一つに震災で失ったもの、そして、前に進むための思いなど様々なことが伝わってきました。

震災当時大学生だった私も、現在五十歳を越え、大学生の子どもを持つ状況となりました。ちょうど震災当時の両親と同じ環境です。改めてその当時を今思うと、両親のすごさを感じます。何もかもが燃え尽きた状況の中、子育てもしっかりと行いながら、仮設のお寺を建設し、新しいお寺を再建しました。もちろん沢山の方々の力で信行寺はここまでこられたと思いますが、その中心として父と母が頑張っていた姿は、本当に素晴らしい、その背中が私が今前に進む原動力となっています。

失われたものがあまりにも大きかった悲しみはもちろん感じますが、何気ない日常が、かけがいのない日常であることを知りました。また、自分を支えてくれている方々に感謝することをすることができました。このことは震災によって得たものです。

この世の中の「無常」と「縁」を思いながら頑張って過ごしていきたいと思います。



「仏の世界と私の世界」

夏季特別法座より②（生老病死）

住職

インドにはお釈迦様の時代以前より真理を探索する求道者が沢山おられまして、ある日そういう方をお釈迦様が目にするのです。薄い衣をまとい鉢鉢の鉢ひとつだけを手に持って凜として歩いて来られるその方を見られて、何者かと従者に問うと「あなたの方は家族を持たずひたすら道を求めて諸国を遊行される沙門です」と聞いて、私もいつかあの方のようになりたいと強く思われたのです。生きているということ、そのことへの問いから老病死を解決していく道を求めていきたい。そういう動機によって仏さまになられたのがお釈迦様です。仏さまのことをインドではブッダとよびます。仏陀というのはインドの言葉を音写したものですから、仏という漢字には意味はありません。完全な悟りを開いて目覚めた者、つまり覚者というのがブッダの意味です。

私たち人間は何でも知っているように思いがちですが、実はなにも本当のことは知らないのです。一番身近な「私」というものが何であるのか、実は全く分かっていないのが私なのです。

インドのブッダガヤには菩提樹の木がありまして、お釈迦様が二千五百年前その木の下で成道されたということです。当時の木ではないでしょうけれども、そこから派生した木が同じ場所にあるのです。お釈迦様が悟りをひらかれた尊い場所だということとで世界中の仏教徒が参拝されます。私も行ったことがありまして、座っておりますと菩提樹の葉っぱがひらひらと落ちてきました。すると葉っぱをめがけて敬虔な仏教徒の人が拾いに来るんです。お土産に持って帰るのでしょうか。ブッダガヤの尊いお釈迦様にゆかりのある樹の葉っぱでございますからね。信行寺にも菩提樹があります。小さな木ですけれどもブッダガヤの菩提樹と同じ形の葉っぱです。お釈迦様が悟りを開かれたという事実を物語るような樹でございます。非常にいいものです。

次号に続く

法語カレンダー

今回は、本願寺出版社の法語カレンダー、三月の言葉の説明をします。上山大峻先生のことばです。



真の智慧は

そのまま大悲でもある

ここでいわれる智慧とは仏智（仏さまの智慧）のことです。また、大悲とは、阿弥陀仏の大慈大悲心を略した言葉です。慈とは、相手の幸せを願うこと。悲とは、相手の悲しみをわがことのように共感し傷む心です。

私達は「平等に」と考え行動することがあります。しかしこれはなかなか難しいことです。条件によって人間の平等は変わります。一人ひとり同じ食べ物配れば確かに平等ですが、赤ちゃんや子供、老人、お相撲さんと食べる能力が変われば、平等といえな

くなるでしょう。また、先生が生徒に平等に接しているつもりでも、生徒によってどう感じるかは違うでしょう。

私達は煩惱が自分を中心とした世界を作り上げています。自分と他人を区別して、本当の命の輝きや尊さを見えなくしてしまっています。自分の都合によって「善い人・悪い人」「役に立つ人・立たない人」などと勝手に作り上げ、愛欲と憎悪を繰り返しながら毎日を生きている姿があります。

私達は迷いの世界に沈んでいますから何が迷いののかもわかっていません。このような迷いの私を「真実に」向かわせるはたらきこそが真実の智慧です。また、その智慧は必ず大悲心となつてわたしの命の上に現れるのです。

仏の智慧は人間の知識とは質が違います。知識から慈悲は出ません。出るのは同情です。同情は一時的な感情ですから長続きしません。どこまでも他人事としか受け止められないのが人間です。如来さまの大悲は常に働いて私達を見捨てることはありません。

日頃の疑問を考えよう

今回は、浄土真宗本願寺派の作法として、皆さんが間違えたり、疑問に思ったりしていることについて紹介します。宗旨宗派によって作法は違いますので、ご注意ください。

仏壇を安置するわけ

故人のためや位牌を置くためのものではありません。日々を生きる支えである阿弥陀如来のお慈悲に生きている私が会う場所ですから、亡くなった人がいないから仏壇はいらないという考えは浄土真宗にはあてはまりません。

焼香の仕方・線香

焼香をつまみ、頭の方に**ただかないで**、そのまま香炉に入れる。回数は、**一回だけ**です。（三回ではない）

線香は短く香炉に入るくらいの長さに折って、横にしてたきます。

線香は**立てません**。



荘厳

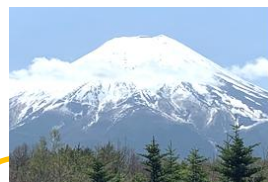
打敷は法事の時に用います。普段には用いません。仏壇の前に座り、鈴をたたき合掌だけする人も多いようですが、本来**鈴をたたくのは、お経をあげる**時に使うものです。

水やお茶をお供えする必要はありません。華瓶が元来水をお供えする水瓶で水に香を与え、腐敗を防ぐために櫛（しきみ）を立てるようになりました。仏壇の中には故人の写真、お骨、お札、宝くじなどを置きません。

スペースや安全性の問題などがあると思います。が、基本的に経卓の上に香炉や蠟燭立を置きません。

いろいろと細かい作法・きまりがあります。参考までに知っておいていただくとよいと思います。それぞれの家庭や地域で行ってきた習慣や方法もあると思いますので、そのお気持ちを大事にされることが大切だと思います。必ず守ってくださいというわけではありません。

信行寺行事予定とご案内



春の彼岸法要

三月二十二日（土）

住職

二十三日（日）

前住職

両日とも午後二時～三時半ごろ

第二十四回 門信徒会総会

四月二十六日（土）午後二時より

おつとめ・総会・法話

花まつり

四月二日（水）午前十時～十二時

読み聞かせや住職のお話、いたやど保育園

園児さんの歌などを予定しています。

詳しくはお寺まで問い合わせください。

編集委員より

新田 光美

一九九五年一月十七日、阪神淡路大震災から三十年という年を迎えました。年月が経つのは早いなあと思うつくづく思います。

振り返ってみれば、あの朝私達は何をしていたのだろうかと……。午前五時四十六分、朝早くても各家庭ではいつもと変わらない朝を迎えようとしていたと思います。思いもよらない一瞬の突き上げと激しい振動が朝の景色を地獄と化してしまいました。

大切なお寺も焼けてしまい、私達はしばらく何も考えられない日々を送ったのではないのでしょうか。

以後も東日本大震災、能登半島地震と大きな地震に見舞われましたが、阪神淡路大震災の教訓は生かされたのでしょうか。これから先もまたいつ来るかわからない地震に備えて、私たちは何を教訓として自らを守っていかなければならないかを考えながら一日一日を大切に生きていかねばなりませんね。

南無阿弥陀仏